SURE 静岡大学学術リポジトリ
Shizuoka University REpository

地域開発の記録文学/思想文学：中上健次『地の果て至上の時』をめぐるメモランダム

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2016-06-07 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 渡邊, 英理 メールアドレス: 所属:
URL	https://doi.org/10.14945/00009459

地域開発の記録文学／思想文学――中上健次『地の果て 至上の時』をめぐるメモランダム

渡邊　英理

一、地域開発の記録と思想

戦後生まれで、はじめて芥川賞を受賞した小説家、中上健次。1946 年に生まれ、1992 年に 46 歳で鬼籍に入った中上は、今年 2016 年には、生誕 70 周年を迎える。この中上健次の文学を、21 世紀のいま、どのように読むことができるだろうか。そのひとつの方途に、地域と開発をめぐる記録文学／思想文学として読む方法を提唱することを試みたい。

和歌山県新宮市の被差別部落を出自とする中上は、自身の「古里」であるその地を路地という虚構の空間として仮構し、その路地をめぐって幾多の小説の言葉を書き紡いだ。しかし、70 年代末から、その現実の路地／被差別部落が、「同和行政」の開発によって解体されてしまうに至る。小説家は、その出来事を、自らの小説の言葉で対峙した。

中上文学において、路地解体という出来事を真正面から「記録」した小説として、短編連作集『熊野集』（1980～82、84）をあげることができるだろう[i]。全 14 編の短編からなる連作集『熊野集』には、生身作家、中上健次と相似形の小説家である「私」が登場する小説が収められている。『熊野集』は、それら小説家の「私」が登場する幾つかの小説で、路地／被差別部落の解体を、ずらし束ねながら記録し、また路地の歴史や意味を思想的に問い直そうと試みる[ii]。

『熊野集』で描かれる路地／被差別部落の解体という出来事。その出来事は、まず「同和行政」という独自の文脈を有する個別具体の開発であり、固有の場所をめぐる開発である。固有というのは、被差別部落という意味でもあり、また中上にとって路地と呼ぶしかない、あのかけがえのない、唯一無二の場所という意味でもあるだろう。

新宮の路地／被差別部落の開発／解体は、1969 年の同和対策事業特別措置法を法的根拠とする「同和行政事業」によって遂行されていった。『熊野集』には、路地／被差別部落の解体が、同時進行形を模して「記録」されるが、その「記録」は、この時期、日本各地で行われていた、さまざまな路地／被差別部落の開発／解体を念頭に普遍化され、また、虚構化が施されたものだったと言えるだろう。このような個別具体と普遍抽象の多層性（両義性）において、路地／被差別部落の開発／解体を、中上文学は「記録」し、その思想を深めていった。

路地／被差別部落の開発／解体という出来事を、短編連作集という形で、掬い／救いとったのに対して、路地が解体された後の世界を描く任を小説家が託すに至ったのが、長編小説『地の果て 至上の時』（1983）である。『地の果て　至上の時』（以下『地の果て』と略記）は、『岬』（1975）『枯木灘』（1976～77、1978）をあわせた紀州サーガ／秋幸三部作の三作目であり、その最終章にあたる。

『地の果て』の世界は、『枯木灘』の結末から三年後の時空におかれている。三部作を貫く主人公／視点人物たる竹原秋幸は、『枯木灘』の最後、異母弟・秀男を殺してしまう。それから『地の果て』までの三年という時間は、秋幸が弟殺しの罪で刑務所に入り、罪を贖うことに費やした「禊」の時間である。と同時に、その時間はまた、秋幸が生まれ幼年期を過ごした路地が開発によって「消しゴムで消されたように」解体される時間でもあった。すなわち、大罪を犯した秋幸への最大の罰が、この路地解体という禍事であったとも言える。『地の果て』は、大阪の刑務所を出た秋幸が故郷へ戻る場面から始発されるが、すでにその時には、「地図一新の大改造」で路地は解体されてしまっていた。

『岬』『枯木灘』『地の果て』と続く中上の紀州サーガ／秋幸三部作には、息子・竹原秋幸と実父・浜村龍造、父息子の物語が孕まれている。秋幸の母・フサだけでなく、二人の女を孕ませて、刑務所に入った実父・浜村龍造。路地において、父なき子として生まれた息子・秋幸と実父・浜村龍造が、最終章『地の果て』では、相まみえて対峙し、小説は、息子による父殺しの物語を胚胎させている。結局のところ、息子・秋幸による父殺しは未遂に終わり、小説の最後、実父・浜村龍造は、自ら縊れ死んでしまう。『地の果て』は、1983 年に出版された書き下ろしの小説だが、この父の自壊は、東の首領も西の首領も虚構の父性という他ないことをあらわとさせる思想的比喩としても読まれ、後の冷戦崩壊を暗示するものとも評されてきた[iii]。

冷戦体制とは、すなわちアジア・太平洋戦争後の世界秩序であり、いわゆる戦後体制のことである。戦後体制である冷戦構造的な父子の物語を孕むこの小説は、もうひとつの戦後――戦後日本社会における地域開発という出来事をも含み込んでいる。以下では、地域開発という主題から、小説『地の果て　至上の時』の一断面を素描することを試みたい。

二、「地図一新の大改造」

長編『地の果て』と短編連作集『熊野集』は、ほぼ同時期に同時並行的な形で執筆されている。短編連作集『熊野集』は、1980 年から 82 年に一時休載をはさみながら、雑誌『群像』に連載され、長編小説『地の果て』は、1983 年に書き下ろしで上梓された。小説家は、その間、韓国、アメリカ、東京、熊野を移動し、

短編連作集を連載しながら、長編小説を書き下ろした。小説家は、路地解体のさまざまな局面を記すにあたって、一方で、小さな小説が撚り集まった「集」の力に頼り、生身の作家と相似形の小説家である「私」を路地に立たせ、また他方で、解体された路地／路地跡の目撃者に、竹原秋幸を選びとり、長編小説という大部なものの力でもって向かい合おうとした。

その作家的系譜において、両者の密接な関係性は、しばしば指摘されてもきたが[iv]、その主題により目を凝らすなら、『地の果て』は、『熊野集』を包含するような立ち位置にあると言える。路地／被差別部落の開発は、1969 年の同和対策事業特別措置法（以下、同対法と略記）を法的根拠とする「同和行政事業」によって遂行されていった。新宮市の同和対策事業として、中上が幼年期を過ごした新宮の被差別部落、春日地区の改良事業の基礎調査が始まったのは、1977 年のことである。すでに、「敗戦後、春日では、一九五三年から五六年にかけて公営住宅法に基づき、不良住宅改良を主眼にした地方改善事業で公営の簡易平屋住宅二二戸の住宅が建設されている」。また、1957 年から 62 年にかけて、「厚生省の地区改善モデル事業指定で春日からは、市内の大浜、野田、下田、橋本地区へと三三戸が郊外へと分散移転し、六三年には、春日に新宮新市庁舎が完成し、翌年臥龍山の大部分が姿を消」していた。しかし、「同和対策事業特別措置法による新宮市住宅改良事業で春日の景観の変貌が始まる」のは、77 年の基礎調査の翌年、78 年のことであった。1978 年には、「新宮市の地区改良事業として春日地区に西棟（十二戸）の改善住宅が建」ち、以後、「八一年度までに計五四戸の造成を完了」する。「七八年には一二戸、七九年に二三戸、八〇年一五戸、八一年四戸、合計五四戸の改良住宅が完成」したと言う[v]。

こうした路地／被差別部落の開発／解体の時代とは、また、戦後の地域開発の時代でもあった[vi]。62 年に、国土全体を開発すべきという意図で全国総合開発計画（全総）が策定され、同対法と同じ 69 年には、新全総が発表されている。新全総は、70 年代も高度経済成長路線をひた走ることを規定路線とし、田中角栄の「列島改造論」は、その開発の夢を広く一般に流布させた。新宮の路地被差別部落の開発は、この全総から新全総にかけての開発の時代と重なる。『熊野集』は、路地／被差別部落の開発を微視的な視点から、複数の短編で細分化し微分化する形で描き出していた。『地の果て』において、その路地は「消しゴムで消されたように」解体されてしまっており、もはや路地には、路地跡の「空地」／「原っぱ」が唯一残されているだけである。この路地を消しめた開発の全貌を、『地の果て』は、より巨視的な視点で俯瞰的に描き出そうとしている。すなわち、小説『地の果て』の中に読み取るべきは、路地を路地跡の「空地」／「原っぱ」へと変えた路地／被差別部落の開発を、「地図一新の大改造」とも称されるより広域的な地域開発の全体の中で位置付けようとする手つきである。したがって、そこに見いだすことができるのは、戦後の地域の開発と路地／被差別部落の開発とを「重なりあう経験」（サイード）として捉える姿勢である。たとえば、『地の果て』の秋幸の視線が捉えるのは、次のような風景であり、その耳に伝わるのは、次のような噂である。

> では擦れ違った四屯トラックはどこから材木を運んで来たのかと訊くと、山から山へケーブルを渡して下の里の窪地にそのケーブルで運んで来た材木を集め運んでいるのだと言った。道がなくともケーブルを張れば材木出しは出来る。昔、秋幸が耳にした山の斜面を利用して軌道の上を木ゾリに乗せて運ぶ木馬出しや、斜面に板を張ってその上を滑らせる修羅出しは過去のものだった。木馬出しも修羅出しも川の支流まで運び、雨が降り、水嵩が上るのを待つ。材木を組みたてそのうちの一本だけカンヌキの用をする材木を抜きとれば充分な水嵩の勢いに乗って次々と川を流れ落ちる、網場という方法は紀伊半島の山の中から材木を出すのに都合よく蛇行する熊野川に適切な方法だった。水嵩と共に流れ出した材木はバラバラに流れても決まったところで溜りをつくり、筏師らはそこで待ち受け、筏に組み、セリ市と製材工場のひしめくその土地めざして川を流しておりてゆく。林道が整備され、林道の充分でないところはケーブルが張られトラックが待ち受けるようになったのは、最近の事だった[vii]。
>
> 浜村龍造は秋幸の眼を見てその中に映っているのが自分ではなく透明な水のダムと幾つも折り重なった山であるのに気づいて振り返りああとうなずき、「このダム出来たおかげで、奥から筏で流せんようになって一時期ようけ失業者出た」とつぶやく。「綺麗な姿しとるけど、何人も筏師どころか製材所も商いやる人間も、ここにダムが出来て水の流れが変っただけで、首つったり夜逃げするはめになったんじゃだ」[viii]。

この場面に読み取るべきは、戦後の熊野が体験することになった地域開発の諸相である。その目撃者となる秋幸とは、『岬』、『枯木灘』において土建業の組で土方仕事をし、この開発の一部を担ってきた者に他ならない。その自らが与していた地域開発の総体が、このとき、秋幸の視覚と聴覚に捉えられる。また、海と山に挟まれた熊野の地において、開発の諸相は、山林を視座におくことで鮮明に描きだされる。とりわけ戦後熊野の開発の中で、小説が焦点をあてるのは、ダム建設であり、それに相即した道路建設／交通網の整備である。

戦後熊野地方におけるダム建設は、地方主体の「熊野ダム」構想から、国主体の吉野熊野総合開発計画へと変転し、展開されていった[ix]。戦後、熊野には、まず敗戦後の電力不足を背景に「熊野ダム」の構想が浮上する。戦後の経済復興に向け、電力増産が国をあげての至上命令におかれる中で、新宮でも、恒常的な電力不足が、しばしば主要産業の製材所の操業を休止させ、問題視されていた。1946年12月21日の南海道大地震の後の熊野の復興計画においても、電力不足の解消は切実な問題として共有されることになる。こうした状況の中、新宮の財界主体で「熊野ダム」計画が構想された。中心になったのは、戦前からの材木商で、戦後

市長をつとめた杉本喜代松である。杉本喜代松は、当時日本一とされた庄川の小牧ダムの堰堤を完成させた石井叡一郎を新宮に招き視察を行わせ調査を進め、やがて市長の身である杉本自身を会長とする熊野川総合開発期成同盟会を発足させる。当初の「熊野ダム」の計画は、高さ200メートル、幅500メートル、最大発電力約70万キロワットと、小牧ダムをしのぐものであり、琵琶湖の三分の一の広さの湖水が出現し補完用のダム二つも計画されていた。「その豊富な電力でもって、紀南地方に一大工業地帯を創設し、京阪神の都市へも送電」し、「またダムとともに道路網も完備し、ホテルを建て、付近の温泉地や海岸の景観と組み合わせて、一大観光地にしようと計画」されたが、一九五一年八月、政府の公益事業委員会が依頼したアメリカの調査機関の最終調査によって計画の断念が決定されることになる[x]。

この「熊野ダム」計画にとってかわるのが、吉野熊野総合開発計画である。この計画は、1950年に公布された国土総合開発法に基づき、「ダムと道路の建設により、水や材木など森林資源をさらに開発する」ことを目的に51年に策定された。まぼろしと終わった熊野ダムの一部は、新しく設立された電源開発株式会社に受け継がれ、熊野川奥地に中規模のダムが建設されるが、しかし、この計画において「新宮の財界はもはや主体ではなかった」。熊野川上流、十津川流域では三つのダム――猿谷ダム（57年）、風屋ダム（58年）、二津野ダム（59年）が、北山川流域では四つのダム――坂本ダム（59年）、池原ダム（62年）、七色ダムと小森ダム（63年）が着工され、並行して道路工事も進められた。北山川流域では奈良県の八木と三重県の木本間が1950年に開通、国道一六九号線として通じ、1959年には和歌山県の新宮と奈良県の五条の自動車道が全通し、国道一六八号線となる。

「ダムと道路の建設による最大の影響は筏の流下が途絶することである」[xi]。開発によるダムと道路の建設は、熊野に多大なる変化をもたらした。

徳川の時代から林業を盛んとした熊野の地。その地で伐採された材木は、長らく「蛇行する熊野川」を用いて運ばれていた。奈良県に端を発し、和歌山県と三重県の県境を流れる一級河川熊野川。その源は奈良県大峰山に発する天ノ川にあり、十津川郷を流れて十津川となり、和歌山県に入って熊野川とよばれる。かつて熊野を参詣する者で、小雲取越の山路を迂回しない者は、団平とよぶ川船に乗り、この川を渡った。そして、大山林地帯である熊野川流域の材木は、この川を下る筏で新宮へと集められたのだった。

材木は、この熊野川をいかに流されたのか。『地の果て』は、その様子を克明に描いている。伐採された材木は、まず山地から主要運搬路の川まで運ばれていく。その輸送は、「山の斜面を利用して軌道の上を木ゾリに乗せて運ぶ木馬出しや、斜面に板を張ってその上を滑らせる修羅出し」に担われていた。中上文学は、これら木馬出しや修羅出しに従事した路地の若衆らの姿を複数的に描いている。伐採された材木は、熊野川上流の適当な広さの場所まで、まずは流され、そこで筏に組まれることになる。筏は、筏師たちの舵取りで、「セリ市と製材工場のひしめく」新宮まで、熊野川を下っていく。途中、網場と呼ばれる、バラバラになった材木を網にかける溜まり場もある。蛇行し、場所によっては流れが急な熊野川では、増水し筏がほどけ、流木となって失われる。その流木を防止し、喰い止める役目を、網場は果たした。

ダムと道路の建設は、この前近代から続く山林をめぐる地場の体系を変容させた。

まず、川から陸へ、筏からトラックへ、材木の輸送の経路と方途が変化した。国道が通り、林道ができ、「ダムが出来て水の流れが変」わっていく。「四屯トラック」が奥地まで入るようになり、筏を組み川の流れで運送された材木は、トラックに乗せられ陸路で輸送されるようになる。ダム建設によって、筏の流下量は減少の一途をたどり、十津川水系では60年に終結、北山川水系では64年3月に最後の筏が新宮の川原町へと到着した。『熊野集』で、解体された路地／被差別部落は更地となり、スーパーマーケットへ続く道路へと変容される。その変化もまた、地域全体の道路整備と相関的な出来事として位置づけられるだろう。

こうした変化に先駆けて、すでにして山林から川までの材木の輸送も変化を遂げていた。『地の果て』で「ケーブルを張れば材木出しは出来る」と言うように、ケーブルを張り器具や機械の力で材木を送る野猿が普及し一般化していく。それにつれ、「山の斜面を利用して軌道の上を木ゾリに乗せて運ぶ木馬出しや、斜面に板を張ってその上を滑らせる修羅出しは過去のもの」となっていく。かつて材木運送の主要幹線たる川へと至る斜面の道の往来は、途絶することを余儀なくされ、人力は、器具や機械の力に取って代わられる。

さらに、その変化は、流通網の更新へとつながり、地域の地場産業や地域社会それ自体の衰退をも、もたらすことになる。「筏が減少し、やがて消滅するとともに、材木の流通に変化がおきはじめた」。ダム建設に伴い、前述のように北山川流域では八木と木本間の国道一六九号線、新宮と五条間の国道一六八号線等が整備され、「十津川流域の材木はトラック輸送で、奈良県や三重県、あるいは、田辺方面にも出荷され」るようになっていく。江戸期から川を下る材木の集積地であり「セリ市と製材工場のひしめく」新宮。しかし、こうした変化で「熊野川流域の森林資源の宝庫を押さえて繁栄してきた新宮も、もはや独占できなくなっていった」のだった。それは、それ以前の時代に地域が長年の積み上げの中で作り上げてきた独自とも言える体系が、より広大な新しいシステムの内部に取り込まれ、その一部に位置付けられていく過程とも言えるだろう。こうして開発によるダムと道路の建設は、材木の街、新宮の繁栄をも失わせる。この変化に対して、新宮木材協同組合を中心とする関係団体は、電源開発株式会社に対して補償金を要求し、紆余曲折を経た四年間の交渉のうえで、1960年に妥結する。

こうした産業構造の変化は、地域の雇用や労働環境や市場の変化に帰結することになるだろう。『地の果て』が描くように「このダム出来たおかげで、奥から筏で流せんようになって一時期ようけ失業者出た」のだし、さらには「何人も筏師どころか製材所も商いやる人間も、ここにダムが出来て水の流れが変っただけで、首つったり夜逃げするはめになった」。開発によるダムと道路の建設は、交通／運輸流通の経路を変更し、産業構造を変質させ、地場産業や街の栄枯盛衰をも支配し、労働環境や市場の変容をも生じさせる。開発がもたらす変化の波は、個々の裸形の労働者をも襲い、雇用や仕事を失わせもする。野猿の普及は、路地の人々を、木馬引きという危険な仕事から解放し、同時に、その職や雇用を失わせた。同様に、ダム建設は、筏師や製材所で働く人々を失業者へと変えていく。小説『地の果て』が描く「地図一新の大改造」とは、これら開発がもたらす総体としての地域社会の巨大な地殻変動すべてを指し示していると言える。

三、労働の痕跡と「裏返された植民地構造」

開発がもたらす地域社会の巨大な地殻変動を、『地の果て』は、「地図一新の大改造」として総体として描きだす。こうした『地の果て』の手法に、島崎藤村の『夜明け前』に通じる方法と問題意識を見いだすことができるだろう。『夜明け前』は、中山道の木曾馬籠を舞台とする[xii]。「田畠の間にすら大きくあらわれた石塊を見るような」山村地帯であり、東と西、江戸と京都、美濃と信濃、あるいは、参勤交代制度を通じて江戸幕府と外様大名をつなぐ媒介の空間であり、街道沿いの宿場という交通の要所であったのが、木曾馬籠である。その地は、明治期の新たな交通網の整備の中で、鉄道網の敷設において主要幹線の位置を外され、また開国によってグローバルな交通の体系の中に飲み込まれていく。『夜明け前』は、木曾馬籠で七代続く本陣・庄屋である青山半蔵という人物を視点人物に、この近代明治期の交通の変容がもたらす、大きな地殻変動を描きだしている。『夜明け前』では、明治期の山林の国有化によって、近隣の住民による伐採が一切禁じられるに至る挿話が批判的に描かれるなど、山林の主題が含まれているが、藤村自身の実父をモデルとする、視点人物である青山半蔵は、自身の理想とする到来した新時代への絶望の中、狂死を遂げる。時代がもたらす幾重にも及ぶ速度をきわめた地殻変動は、藤村の実父／青山半蔵を過去の遺物へと追いやった。『地の果て』で、秋幸の実父、浜村龍造も、小説の最後、自ら縊れ自死するが、その父の死もまた、山林と父の自死／狂死という点で『夜明け前』のモチーフの只中にあり、時代の地殻変動と無縁のものではないだろう。実際、『地の果て』では、先述したように産業構造の変化が現出し、また、台湾からの安価な輸入材が市場へ流通し、国内産の材木の駆逐がはじまる予兆も示されている。戦後の地域開発による地殻変動と、現代のグローバルな交通の網の目は、浜村龍造を、『夜明け前』の青山半蔵の磁場へと一直線に向かわせる。

他方で、『地の果て』は、この地殻変動の波に翻弄される、いまひとつの一群をも描き抜いている。かつて浜村龍造の朋輩であったヨシ兄、そのパートナーのスエコ、ヨシ兄の息子、鉄男ら、路地跡の「空地」／「原っぱ」に小屋やテントを建てて住まう者たち、すなわち、末端の労働者である。路地跡の「原っぱ」に小屋掛けをし、テントを張って暮らす野宿状態の労働者たち。毎日のように息子にシャブの注射をさせ、「シャブ中」のヨシ兄は、酒を飲み、妄想のようなジンギスカン幻想を抱き、語り続ける。

> モンは仕方なしに「ヨシ兄は昔、この辺りから筏師の代表みたいになって鴨緑江へ行たんやねェ、ほれぼれしたなァ。若て、男前やったから。今みたいにシャブ中で、昔の思い出かボケとるのかそんなんと違て見とったら胸がきゅっと痛なってくるくらいやったね」[xiii]。

「なにを言うとるんよ、鴨緑江節でも歌てくれでもしたら昔思い出すかもしれんけど、あれから何年たっとるんよ」モンが話をそらそうとすると突然、朝鮮と支那の境のあの鴨緑江、とヨシ兄は歌い出す。流す筏はよけれども、雪や氷に閉ざされてよ、明日は又、安東県に着きかねる、とヨシ兄は歌い自分で拍子を取り合の手を入れる。「どこぞで聞いたな」と若い衆が言うと、「このあたりから筏師がようけ行たんやから」とモンは言い、あわてて次の話題をつくろうとするように、「ヨシ兄は筏やめて満州の馬賊に入り込んだんやねェ」「おうよ、あそこは綺麗なもんじゃったど、リラの花が咲いとるんじゃ。その時は満州じゃったがリラの花咲いとってね、どこの国の姫様か知らんけど話しかけてきて、連れてってくれと言うんじゃろと察して後に乗せて抱えさせて馬で一目散に走ったんじゃ。駅まで走ったら降ろしてくれとしきりに言うんで降ろしたら、それまで知らん顔しとった者らが姫様の周りに一斉に集まってくる。ジンギスカン、おおきにとその周りの男らに守られて姫様が俺に言う。いまでもシャブ射って眼がさえたり耳がさえわたったらリラの花が咲くしゅるしゅるという音とその声が聴えてくるんじゃ」ヨシ兄は息をつぎ眼をとじる。「おうよ、リラの花が咲く時、しゅるしゅると音がするんじゃよ」

ヨシ兄は幻聴が起ったのか声を強めて言い、しゅるしゅる、しゅるしゅると小声でくり返す。花がその音と共に咲くのならヨシ兄の体の周りはとっくにリラで埋もれているほど繰り返し、たまらなくなったように若い衆は笑い出した。笑い声がモンを不安にさせ、習い性になったように水を飲んだ。秋幸は見ていた。ヨシ兄が本当は鴨緑江へ筏師として行ったことがあるのか、馬賊に加わり満州を馬にまたがって駆けていたのか、誰も知らなかった[xiv]。

ヨシ兄ら路地跡に住まう野宿労働者／「労務者」たちの過半は、路地の者たちである。それは、かつての山仕事の人夫たち、木馬出しや修羅出し、あるいは筏師として働いていた者たちのことであり、地域開発の結果として余剰人口へと押し出されることになった労働力だと言える。そのような視点を携えたとき、「シャブ中」のヨシ兄のジンギスカン幻想も、単なる妄想として片付けられない歴史性を有して、迫ってくる。

「筏師の代表みたいになって鴨緑江へ行たんやねェ」とあるように、このヨシ兄のジンギスカン幻想は、まずもって、ヨシ兄らが戦前に体験したであろう労働の痕跡だと言える。

鴨緑江は、戦前の満州と朝鮮の国境を西流する川である。白頭山に源を発し、黄海に注ぎ、その長さ790キロにもおよぶ鴨緑江。鴨緑江節は、別名恵山鎮節とも呼ばれ、大正年間（1912～1926）に流行した俗謡で、筏師たちが親しむ労働歌であるが、朝鮮の鴨緑江に出稼ぎに行った筏師たちが歌いはじめたものとも伝えられる。はたして、『地の果て』のヨシ兄が、「本当は鴨緑江へ筏師として行ったことがあるのか、馬賊に加わり満州を馬にまたがって駆けていたのか、誰も知ら」ず、定かでない。しかし、ここでのヨシ兄は、かつて鴨緑江へと渡った「筏師の代表」、その正統な末裔として、鴨緑江節を歌っている。

『地の果て』で「台湾も鴨緑江もこの土地とは昔から材木の取り引きはあった」というように、「明治三十八年、わが国が日露戦争に勝って、満州（中国東北部）に南満州鉄道会社を設立し、また朝鮮に総督府を置いて支配権を固めるとともに、新宮の材木業者も進出をはかっている」[xv]。「はじめは新宮材を輸出した。が、やがて満州と朝鮮にまたがる鴨緑江や豆満江流域の森林が開発されると、豊富な地元材に押され」た[xvi]。しかし、「新義州（朝鮮）などに店をかまえて、鴨緑材の伐り出しを行う業者もおり、彼らの手引きで熊野川の筏師たちも大挙して海を渡ることになった」のだった。宇江の『熊野川』で、1918（大正七）年生まれの中森叡は、明治25年生まれの自分の父親が、鴨緑江の筏乗りとなり、家族をあげて恵山鎮（朝鮮）へ移り住んだ経験を語っている[xvii]。鴨緑江節を歌うヨシ兄とは、これら「鴨緑江の筏乗り」となって渡った路地の者たちの代表である。小説の現在、かつて筏乗り、木馬出しや修羅出しとして活躍した、これら路地の者たちは、開発によるダム建設と道路整備などによって、その職を失っている。鴨緑江節とは、これら流動する労働者たちが過去に刻んだ「栄光」の時代の記憶であり、また、その不安定な流動の軌跡でもある。

さらに、ヨシ兄が歌う鴨緑江節は、「裏返された植民地構造」の下で「低開発の開発」として行われた、戦後の地域開発の構造と様相をあらわとするものだろう。

戦後日本社会における開発。それは、都市社会学者の若林幹夫が、郊外の開発をめぐって言うように、近代以降の人の移動、すなわち農村から都市への労働力移動を背景とし、また、その特徴は、社会学者の町村敬司らが明らかにし、メディア研究者の吉見俊哉が強調するように、「裏返された植民地主義」と「低開発の開発」にある[xviii]。

近代とは、とりもなおさず国民国家の時代である。戦前の日本は植民地を拡大し、戦後は、それを「喪失」することになるわけだが、日本社会の開発は、この伸縮する国民国家の国境が括りだす「国土」のうえで行われた。明治以降、殖産興業の動力であり、結果でもあるところの人口増加は、人口移動という現象と不可分に生じ、とりわけ、近代以降の社会の工業化、都市化に伴い、農村から都市へ多くの労働力が移動した。戦前において、こうした中で生じた余剰人口は、主に植民地の開発を通じて解決がはかられることになる。それは、一重に国内に比べ、石炭などの地下資源に恵まれた大陸や半島のほうが、より効率的で、より質の高い開発を行えるという一事を理由とした。

敗戦後の日本社会は、開発の「フロンティア」としてあった植民地を「喪失」する。したがって、戦後の人口の増加と労働力の移動は、その条件下において、対処されることになる。戦後、復員者の帰還をはじめとする「戦地」から「内地」への人口流入と、それが伴う出産は、人口増加を累加させ、また戦後の復興は、農村から都市への労働力の移動を加速させた。ここで、あらためて注目されたのが、地方であった。

すでに地方には、戦前から、水力発電所の建設が盛んに行われ、都市部の電力供給地とされるなど、従属的な位置が与えられてはいた。しかし、植民地の「喪失」に伴い、戦後の地方は更なる開発の対象として目されることになる。とりわけ東京オリンピックと大阪万博が終わり、「中央」の開発の目処がつくと、中央に従属した新たな「植民地」として、地方が開発の主たる舞台へ躍り出ることになったと言える。こうした「裏返された植民地構造」の中で、戦前の植民地の後塵を拝し、都市部に比して「低開発」地域である地方を対象とする点で、その開発は、「低開発の開発」だと言えた。

こうした戦前との連続性の中で行われた「裏返された植民地主義」と「低開発の開発」としての戦後開発を、もっとも顕著に体現する企業としてあげられるのが、チッソである。後に、水俣病を起こす企業チッソの前進、日本チッソ肥料は、戦前の日本最大の化学産業であるが、もとは鹿児島県大口の金山に電気を送るために建設された曾木水力発電所を出発点とした。この日本窒素肥料が発展して、日窒コンツェルンとなり、朝鮮半島で大規模な電力開発事業を展開していくことになる。戦前の日窒コンツェルンの資本金や発電量の多くは、この朝鮮での電力事業に支えられ、その朝鮮での大規模発電の中軸を担ったのが、重力式コンクリートダム、水豊ダムである。そして、この水豊ダムが、作られたのが、他でもない鴨緑江なのだった[xix]。

日本窒素の場合、戦後は、朝鮮半島から、元々の拠点であった水俣に舞い戻ってくるが、戦後のチッソの

経営を支配していくのは、この朝鮮帰還組であったと言う。したがって、チッソの戦後の水俣での開発というのは、「裏返された植民地構造」のなかで行われ、そうした中で、日本近代最大の公害病である水俣病が引き起こされていったと言える。すなわち、朝鮮半島のダム建設のなかで培われた技術は、敗戦により「日本回帰を余儀なくされた製造企業、建設会社、技術者、官僚などを介して、日本列島の戦後の大ダム開発へと直接つながっていく」（町村敬志『開発主義の構造と心性』お茶の水書房、2011 年）のだ。

戦後の熊野で行われたのは、まさに、こうした意味での地域開発であった。ダムが建設され、交通網が整備され、関西の大都市圏への電力供給地としての従属的位置が与えられ、地域独自の地場の体系が揺るがされていく。鴨緑江節を通じて、小説が浮かび上がらせるのは、こうした戦後地域社会を襲った「裏返された植民地主義」と「低開発の開発」としての地域開発のあり方なのだった。

四、路地なき後の労働者

鴨緑江節を歌うヨシ兄ら路地の者たちを、小説『地の果て』は、路地で他の種類の労働者たちとも出会わせている。「秋幸は訊かなくとも、この土地の土方らの力の均衡を破るように出現した受注を、未熟な単に使い走り程度しか出来ない流入して来た労務者を使う事によってやっと消化し、消化出来ない者は潰れ、消化しようとして労務者らの身の安全や休養を顧みずに人をかき集め奴隷を叱咤するように動かす者が、一夜にして成り上るのだという事を理解した」。ヨシ兄ら、路地の者らとともに路地跡の「空地」／「原っぱ」に住む「労務者」とは、開発でわく地方都市に「流入して来た労務者」たちのうち、仕事にあぶれた者たちのことである。

『地の果て』を論じる中で、このような野宿状態の労働者／「浮浪者」たちに、ひとつの可能性を見出したのは、谷川雁である。「水ではなく火でなければならぬ。火をあがめるのではなく火をもてあそばなければならぬ」。「その土地のもっとも不毛な空き地の、定住を忌む思いの直接的表現としてのテント、バラックに拠り、どのような定職にもつかず、自由な結婚をいとなみ、体制をゆすり、近親者にくらいついて――水への憑依を拒否する一群は、事態の深部において、火に憑依する者である」。「今日もしプロレタリアートの純粋な心情というものがありうるとすれば、その最大公約数のごときものがここに示されている」。「これが労働者であり、したがって近代であるものの心象風景、その直線的な人格化である」（谷川雁「憑依の分裂を知る者――中上文学・二泊三日の旅から」『国文学　解釈と教材の研究』（一九八五年三月号））[xx]。

この見方には、大正行動隊から退職者同盟へと展開していった、雁の「工作」の軌跡が透かし見える。エネルギー転換によって石炭産業が整理され、合理化による馘首が進行する。それに伴い、かつて栄光を誇った労働運動が次第次第に後退していく。この「後退」を消極的なものとすることをよしとせず、ひとつの積極的な機会に転じようとしたのが、退職者同盟の試みだったと言える。退職者の労働組合という極めて逆説的な企て。そこには、そもそも炭鉱労働者になった瞬間からただちに失業者以下である、という極めて冷徹な現状認識が潜在している。自らの「労働力」を商品化することが、ただちに失業と同義であり、さらには、生命の維持や保障のために「実存」を引き換えとするような過程が労働者になることだとするならば、そのような「労働」の回路から常にはみだしてしまうこと（＝「失業」）だけが可能とする個別の、かけがえのない生を開く場。そのような場を、雁は、かけがえのない拠点とした。中上の小説『地の果て』のヨシ兄と鉄男の父子、ヨシ兄とスエコの男女の中に、雁が読み取った「近代」の「心象風景」や、その「直線的な人格化」、そして「プロレタリアートの純粋な心情」。それは、「不適切」な「労働力」として、「労働」の回路からはみだしてしまう野宿状態の労働者たちが輝く「実存」の拠点とも言うべきものである。

中上の路地小説で、木馬引きや筏流し、飯場労働者や炭鉱夫など、寄せ場を巡る路地のアニたちもまた、雁が言うような「労働」と「失業」の間で捉え返すべき存在なのだろう。馴致されない、歪な「労働力」として、短くも、実存的な生を生き急ぐ者たち。『千年の愉楽』における、中本の一統たる半蔵をはじめ、路地の若衆たちは、放蕩へと、その身をふけらせ、「労働力」になることを拒み、その「実存」を、光り輝かせる。「不適切」な「労働」が開く、生の瞬き。『千年の愉楽』が救い／掬いとるのは、そうした路地ありし頃のアニたちの凝縮した生の刹那である。

後の『讃歌』では、このアニたちの、路地なきあとの行方が描き出される。かつて寄せ場を渡り歩いた路地のアニたちは、路地解体の果てに、「性のサイボーグ」と化して、『讃歌』が描く都市へ、その姿を現した。

フォーディズム時代からポスト・フォーディズム時代へ。製造・重化学工業から、サービス・情報産業へ。路地解体の過程とは、産業構造の巨大な変化の時代であった。その変化に伴い、フォーディズム時代の安価な労働力の供給源として機能した「ゲットー」は、「職なしゲットー」と化し、そのコミュニティ機能も希薄化し、果てしない空洞化が進行する。そうした過程の中で、もはや産業予備軍ですらない、「廃棄可能な人間たち」が大量に「生産」されていくことになる。その突端を、1960 年代半ば、筑豊の炭鉱にて先駆的に体験することになったのが、谷川雁であり、中上は、『地の果て』で、路地跡の「空地」／「原っぱ」の野宿状態の労働者たちに、その姿を凝縮させた。

その「廃棄可能な人間たち」の行き先のひとつに、中上が『讃歌』において選びとったのは、都市の性産業の現場であった。『日輪の翼』で路地のオバたちを冷凍トレーラーに乗せ旅にでた路地のアニことツヨシは、『讃歌』では、その名をイーブと変え、東京で男娼として生きている。異性愛と同性愛、双方の欲望を持ち、自らの性や身体を交換の対象にのみ化すことが、ここでのアニの生業である。「性のサイボーグ」とは、路地を解体されたあとの世界を生きるアニたちの「意志的な記憶喪失のスタイル」（井口時男）としてあるととも

に、このように専ら性的なるものとして、自らの身体を一義的に先鋭化＝改造させる行為を比喩したものであろう。三・一一以後の視力で見れば、このように、性的身体として「人体」を改造する路地のアニの傍にこそ、「原発ジプシー」（堀江邦夫）がいたことが分かる。『紀州――木の国・根の国物語』には、紀伊半島にふって沸く原発誘致の話がうっすらと描き込まれ、また、小説『火まつり』の舞台、二木島にも、原発建設の噂は、寄せては返す波のように渦をまいている。『地の果て』において、新宮市長の二村とは強引な原発誘致を進める「ローカルエリート」として描かれている。「二村が市長に当選してから、高速道路を国に圧力をかけて決定し、原子力発電所を強引に可決し、リコールされたが再度それを乗り切って市長の座を守ったと言う」。中央対地方、中央あっての地方というではなく、地方と中央の双方へと集る「ローカルエリート」と中央の共犯をどう立ち切るか。断ち切るだけでなく、どう一掃するか。ここには、そうした問いも胚胎されている。これらは、いずれも、まぎれもなく、中上の小説が書かれた時代のひとつのリアリティの証である。そのような時代、路地のアニたちのうち、あるものは、ツヨシ／イーブのように都市の末端で性産業に従事し、あるものは、原発労働者として各地の原子力発電所を渡り歩く。

放射能に身体を蝕まれ「被曝者」となる。「原発ジプシー」とは、そのような「棄民労働」への従事を余儀なくされる者たちのことである。言わば、人間の手で自ら作り上げてしまった、けして勝つことなどできない「見えない敵」――放射能と戦う「新しい人間」へ、自らの身体機能を特化＝改造する者。「サイボーグ」とは、その比喩とも見える。「原発ジプシー」という名の「サイボーグ」とは、夭折する『千年の愉楽』の路地のアニらの末裔なのだった。

路地が解体された後の世界の「職なしゲットー」や、そこで生み出される「廃棄可能な人間たち」。その萌芽は、すでにして『地の果て』における路地跡の「空地」／「原っぱ」に住まうヨシ兄ら、野宿状態の労働者たちに萌されている。かつて、中上は、「何度も小説にしたこの路地がたえず新しい読み終る事のない本としてある」と言った。たえず新しい読み終わる事のない路地には、かつてあったことだけでなく、読者の「いま・ここ」に起こっていること、すなわち、それが書かれた時点では未来に属する出来事までも、書き込まれている。そのような本として路地を、路地の小説を、いま、この時代に再読することができる。路地なき後の世界をも、中上の路地は、小説という形をもって、つかみとっていたのである。

附記１

中上健次の文学には、人種民族差別及び、社会的差別に関わる用語や表現が使用されている場合があるが、中上文学が差別構造の矛盾を本質的なテーマにおいたことを重視し、全て、原文のまま引用している。『地の果て　至上の時』は、『中上健次集六』（インスクリプト、二〇一四年）に拠っている。引用の際は、頁数のみ記した。また、その他のテクストについては、『中上健次エッセイ撰集』青春ボーダー篇（恒文社２１、二〇〇一年）・文学芸能篇（恒文社２１、二〇〇二年）に依り、引用の際は、『エッセイ撰集　文学芸能篇』もしくは、『エッセイ撰集　青春ボーダー篇』と略記したうえで、頁数を記した。

附記２

本研究は、日本学術振興会・科学研究費助成事業「現代文学における「地域」と「開発」をめぐる系譜学的研究」〔若手研究（B）研究課題番号：26870514（H26～H28)〕による研究成果の一部である。

[i] 『熊野集』は、1980 年から 82 年まで一時中断を挟みながら雑誌『群像』に連載された十四編の小説で編まれる。
　単行本は、1984 年に講談社より上梓され、各短編は発表時の順番で並べられ収められた。

1、「不死」(『群像』1980 年 6 月号)　2、「桜川」(『群像』1980 年 7 月号)
3、「蝶鳥」(『群像』1980 年 8 月号)　4、「花郎」(『群像』1980 年 9 月号)
5、「海神」(『群像』1980 年 10 月号)　6、「石橋」(『群像』1980 年 11 月号)
7、「妖霊星」(初出時のタイトルは、「ヨロボシ」　『群像』1980 年 12 月号)
8、「勝浦」(『群像』1981 年新年号)　9、「鬼の話」(『群像』1981 年 2 月号)
10、「月と死」(『群像』1981 年 3 月号)　11、「偸盗の桜」(『群像』1981 年 4 月号)
12、「葺き籠り」(『群像』1982 年新年号)　13、「熊の背中に乗って」(『群像』1982 年 2 月号)
14、「鴉」(『群像』1982 年 3 月号)

[ii] 例えば、『熊野集』「石橋」は、フランツファノンなどの思想を媒介に紡がれる路地／被差別部落の思想文学として読まれうる。詳細は、拙稿「媒介する言葉と路地の夢」(『翻訳の文学／文化の翻訳』11 号) を参照のこと。

[iii] 柄谷行人『坂口安吾と中上健次』(太田出版　1996 年)

[iv] 柄谷前掲書では、長編『枯木灘』の一方に短編連作集『化粧』があり、長編『地の果て』の一方に短編連作集『熊野集』があることを踏まえ、物語＝民俗学的空間と、私小説＝自然主義的空間という日本近代文学の「起源」において構築された二つの制度を脱構築する手続きを、『熊野集』に見出している。

[v] 守安敏司『中上健次論　熊野・路地・幻想』解放出版社、二〇〇三年、二三六～二三九頁。

[vi] 戦後地域開発の文脈については、多田治『沖縄イメージの誕生　青い海のカルチュラル・スタディーズ』(東洋経済新聞社　2004 年) を参照した。本書によると、その文脈は、以下の通りである。1962 (昭和 37) 年、高度経済成長の途上で、全国総合開発計画 (以下「全総」) は、策定された。これは、60 年の国民所得倍増計画により、太平洋ベルト地帯を中心に工業化が進められた結果、過密・過疎や地域格差が問題となり、国土全体を開発すべきという意図で立ち上げられたものだった。この計画は、うまくいかず、「工業化による公害という副作用」を地方に広げる結果となった。しかしながら、「全総は開発による〈国土〉の統合を、高度成長は経済による〈国民〉の統合を、同時並行で進めていった」。
　公害列島化が進むにつれ、巨大開発への批判は高まり、全総は見直しをせまられるが、69 年に発表された新全総は、こうした世論に逆行したものだった。それは、70 年代も高度経済成長路線をひた走ることを規定路線とするもので、交通・通信網の整備を、その具体策とした。ジェット航空機・空港・新幹線・高速道路・港湾とった高速交通システムを確立し、電話やデータ通信による通信網を整備する。このネットワークをもとに、地域格差を解消し、大規模工業地帯の建設を目論んだ。田中角栄の『日本列島改造論』(72 年 6 月) は、こうした新全総の理念を広く一般化し流布させた。「列島改造」は、土地神話を呼び起こし、地価の高騰を招くこととなり、やがて 73 年秋のオイルショックにより、新全総と列島改造の成長路線は、中断を余儀なくされる。
　また、この間、64 年には東京オリンピック、70 年には大阪万博が行われる。多田治が言うように、「オリンピックと万博を起点として、巨大な「お祭り」を起爆剤にして公共事業を集中させ、経済効果をあげるという、地域開発の手法が確立した。イベント文化の祝祭性が、地域開発の実質性と結びつけられた」のである。

[vii] 中上健次『中上健次集六』『地の果て　至上の時』(インスクリプト　2014 年)　74 頁

[viii] 中上前掲書　85 頁

[ix] 熊野ダムの構想については、宇江敏勝『熊野川―伐り・筏師・船師・材木商』(新宿書房　2007 年)「第 3 章　木の花咲く町で―材木商・杉本義夫」を主に参照した。

[x] 宇江前掲書、242～243。「熊野ダム」計画の断念は、川床の砂利の深さの把握ができないこと、降雨量の多さが工事の障害になること、水没地帯への補償の見通しがたたない、などが主な理由であった。

[xi] 宇江前掲書　244 頁

[xii] 島崎藤村の小説『夜明け前』は、一九二九年から三五年にかけて雑誌『中央公論』に連載された。単行本は新潮社より、第一部が一九三二年一月に、第二部が一九三五年十一月に上梓されている。物語世界の現在時は、およそ一八五三年から一八八六年におかれている。

[xiii] 中上前掲書　100 頁

[xiv] 中上前掲書　100～101 頁

[xv] 宇江前掲書　218～219 頁

[xvi] 宇江前掲書　219 頁

[xvii] 宇江前掲書　95 頁

[xviii] 戦後日本の開発の「裏返された植民地構造」と「低開発の開発」の文脈の記述は、主に吉見俊哉『夢の原子力』(ちくま書房　2012 年) を参照している。

[xix] 吉見前掲書によれば、1937 年の時点で、日窒コンツェルン資本金総額二億八千万円、そのうち四割を超える一億二千万円余が朝鮮を拠点にしたものであり、また、同日窒コンツェルン全体の発電量の四五万五〇〇〇キロワットの 72%が朝鮮におけるものでもあった。

[xx] 谷川雁「憑依の分裂を知る者――中上文学・二泊三日の旅から」の引用は、『KAWADE 道の手帖　谷川雁 詩人思想家、復活』（河出書房新社　2009 年）による。なお、本稿四節「四、路地なき後の労働者」は、既発表の『中上健次集　三』「月報――谷川雁と中上健次」（2015 年 1 月）および「『西日本新聞』「谷川雁と中上健次（下）」（2015 年 5 月 27 日）における内容と一部重なるものである。